

英語の副詞stillの多義構造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1897

英語の副詞*still*の多義構造

皆 島 博

(2007年8月27日受付)

1. はじめに

本稿では英語の副詞*still*の意味拡張および多義構造について認知言語学的な分析を行う。基本的な用法として、*still*は「時間の副詞」(temporal adverb) および「非時間の副詞」(non-temporal adverb) の二つを持つといわれる (Michaelis 1996:179)。実際、いくつかの英英辞典や英和辞典における副詞としての*still*語義の記述を整理してみると、おおまかに次のような3系列に分類できるようである：

(1) 時間 (継続)

John is *still* standing.

<ジョンはまだ立っている>

(2) 非時間 (反意)

John was hungry; *still* he wouldn't eat.

<ジョンは空腹だった、だが食べようとしなかった>

(3) 非時間 (強意)

John is tall, but his sister is *still* taller.

<ジョンは背が高い、しかし彼の姉はさらに背が高い>

まず、時間の副詞としての用法に含まれるのが (1) の*still*である。これはある動作・状態が続いていること、すなわち、「継続」の意味を表している。また、この意味の*still*には発話者の抱く「驚き」と「意外性」も含意されていることが多い、ということはいさしばしば指摘されるところである。次に、非時間の副詞としての用法に該当するのが (2) と (3) の*still*である。(2) の*still*は、接続詞的に用いられており、前の節 (事前に発言された内容) と後の節 (*still*を含む節の内容) とを照らし合わせると、前の節の内容からは予測しがたい、少なくとも発話者にとっては、意外で驚くべき内容を後の節は含意している (Quirk *et al.* 1972:164)、すなわち、「反意」

の意味¹を表している。(3)の*still*は、比較級とともに用いられているが、この場合、比較級の意味を強調している、すなわち、「強意」の意味を表している。

このように、英語の副詞*still*の3系列の語義は一見相互に関連性がないような意味のネットワークを構成しているかのようにも思われる。しかし、基本義から転義への意味拡張のプロセスをたどっていくと、必ずしも無秩序な意味拡張を展開しているわけではない。本稿は、*still*の多義性について、認知言語学における「ベース」(base)と「プロファイル」(profile)の概念(Langacker 1987, 1988)を部分的に援用することによって、*still*の意味拡張のプロセスおよび意味のネットワークについて明らかにしていこうとするものである。

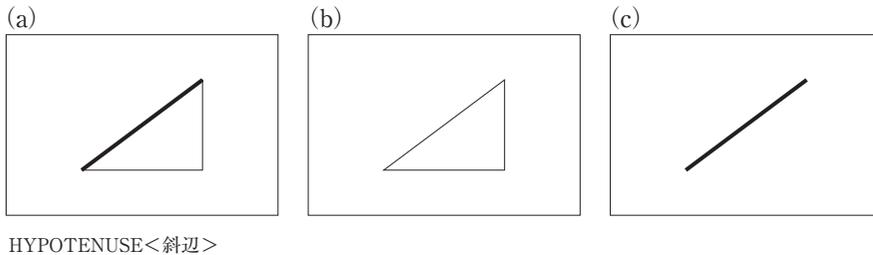
2. 理論的前提：ベースとプロファイル

本稿では、英語の副詞*still*の多義構造を分析するにあたり、認知言語学におけるLangackerの用語「ベース」と「プロファイル」の概念を部分的に援用する。認知言語学において、語の意味は「概念化」という名の下に心的経験として捉えられ、辞書の意味と百科事典の知識とは明確に区別することは不可能であるという立場が取られる²。

認知言語学において、語の意味は複数の認知領域において記述されるが、ある特定の認知領域における全ての構造が等しく扱われるのではなく、焦点化されていて際立ちの大きい「プロファイル」と呼ばれる部分とそのプロファイルの背景的要素として機能する「ベース」とに分かれる。まず、プロファイルとは、語の意味を得る際に焦点化される部分的な構造のことである。一方、ベースとは、語の意味を得る際にその前提として概念化されるもので、プロファイルに対して、その背景となるものである³。

例えば、「直角三角形」における「斜辺」という語の意味記述においては、認知領域における直角三角形の形状が最も重要になる。この場合、認知領域は「空間」であり、この認知領域において想起される概念内容の全体、すなわち、【図1】(b)のような直角三角形の形状全体がベースとなる。かくして、【図1】(a)のように直角三角形の3辺の1つを構成するこの「斜辺」が焦点化、すなわちプロファイルされることになる。というのは、「斜辺」の意味を規定する場合には【図1】(c)のように1本の直線だけを想起するだけでは不十分であり、3本の直線からなる直角三角形の形状全体が概念化されなければならないからである。このように、特定の言語表現が直接指し示す部分をプロファイルと呼ぶ(辻 2002:236)。

【図1】空間の認知領域における直角三角形の斜辺 (Langacker (1988:59) より)



3. 英語の*still*の多義構造

3.1 基本義

本節では、英語の副詞*still*の意味分析を行う。*still*の基本的な意味(=基本義)⁴は、時間の副詞としてのもので、ある動作・出来事が続いていること、すなわち、「状態の継続」であると仮定しても差し支えないと考えられる。また、時制に関しても、*still*は現在・未来・過去時制のいずれにおいても用いることができるので、*still*の意味はすぐれてアスペクト的であるともいえる(Kreidler 1998:199)。ここで、「状態の継続」の意味の*still*に共通する認知領域を仮定するために、次のような文を考えてみよう。

(4) a 過去から現在までの継続

Here comes the boss. He is *still* mad at me from yesterday.

<社長がやって来た。彼は昨日から私のことをまだ怒っている>

b 現在から未来への継続

The door will *still* be open next week.

<ドアは来週もまだ開いているだろう>

c 大過去⁵から過去のある時点までの継続

Boy, it was great when I was in my twenties. I *still* had a full head of hair back then.

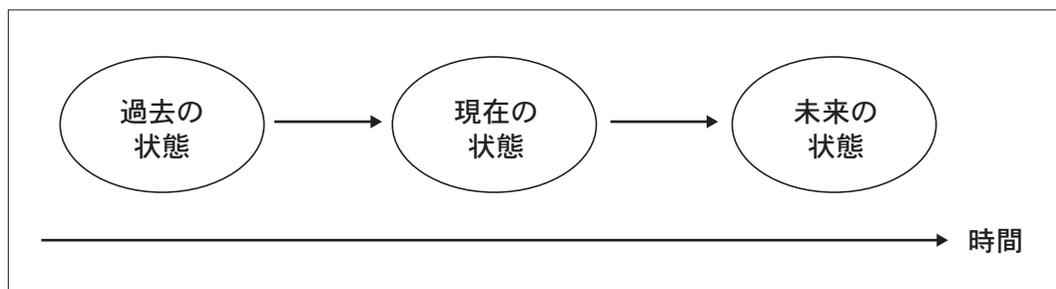
<ああ、二十代の頃はよかった。その時はまだ髪がフサフサだった>

上の(4a)(4b)(4c)は時制における違いがあるが「状態の継続」を表しているという点では共通しているように思われる。すなわち、同一の時間軸上(【図2】参照)で「過去」⇒「現在」⇒「未来」という順序で連続して連なっている「状態の継続」である。

時間の*still*は発話時において「過去の状態」「現在の状態」「未来の状態」のいずれかを想定している。まず、(4a)には、文で述べられている出来事が「過去から現在まで継続している」という含みがある。次に、(4b)には、文で述べられている出来事が「現在から未来まで継続する

(ただし、その出来事が現在開始したか過去のある時点に開始したかは不明)」という含みがある。最後に、(4c) には、文で述べられている出来事が「大過去から過去まで継続している (ただし、その出来事は現在まで継続していない)」という含みがある。したがって、時間の*still*の概念の共通のベースとしては、次のようなものを仮定することができるであろう。

【図2】 *still*の共通のベース：過去⇒現在⇒未来への時間軸上での状態の流れ



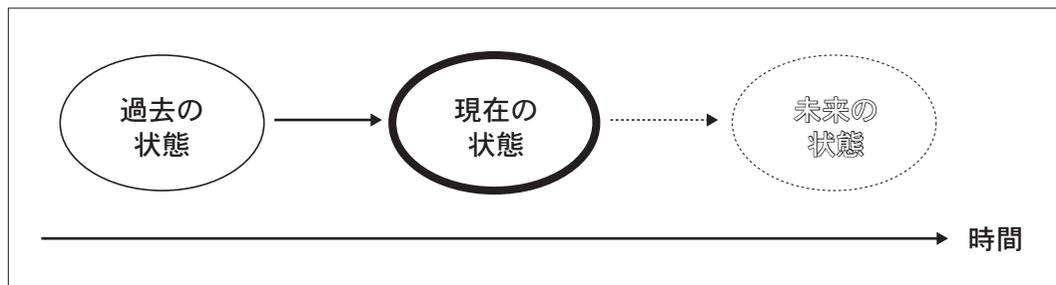
上で時間の*still*について共通のベースを仮定した。そこで、まず、「過去から現在までの状態の継続」、すなわち「現在の状態」をプロファイルする*still*の認知的構造について考えることにする。

- (5) Mary was a crybaby when she was little. Now she has grown up, and she is *still* a crybaby.
 <メアリーは小さい頃泣き虫だった。大人になった今もまだ泣き虫だ>

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・過去から現在までの状態の継続に焦点が置かれている
- ・現在の状態をプロファイルしている
- ・未来の状態については焦点が置かれていない

【図3】 *still*の基本義：現在の状態をプロファイル



したがって、現在の状態をプロファイルする*still*の基本義については、《過去に開始した出来事が》《発話時点（＝現在）でも継続している》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

次に、「現在から未来への状態の継続」、すなわち「未来の状態」をプロファイルする*still*の認知的構造について考えることにする。

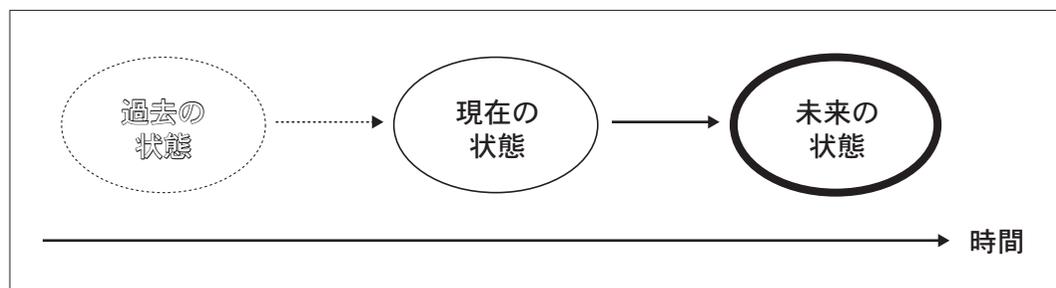
(6) Will you *still* be here when I get back?

<私が戻るまでここにずっといてくれますか>

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・ 現在から未来までの状態の継続に焦点が置かれている
- ・ 未来の状態をプロファイルしている
- ・ 過去の状態については焦点が置かれていない

【図4】 *still*の基本義：未来の状態をプロファイル



したがって、未来の状態をプロファイルする*still*の基本義については、《発話時点（＝現在）すでに存在する出来事が》《未来まで継続する》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

最後に、「大過去から過去のある時点までの状態の継続」、すなわち「過去の状態」をプロファイルする*still*の認知的構造について考える。

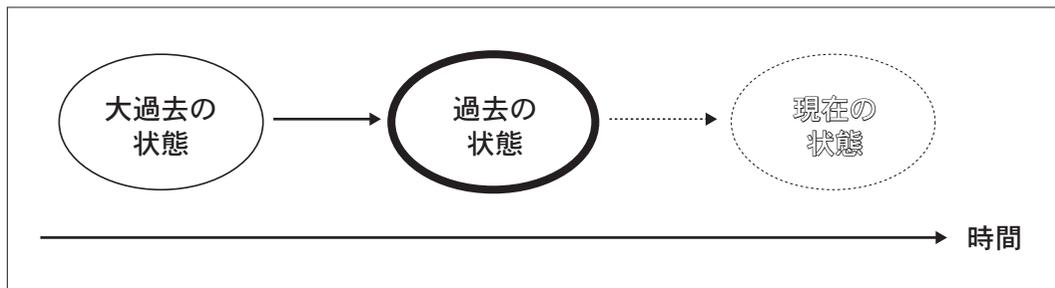
(7) I went to see if my wife had woken up yet, but she was *still* asleep.

<私は妻がもう起きているかどうか見に行ったがまだ寝ていた>

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・大過去から過去までの状態の継続に焦点が置かれている
- ・過去の状態をプロファイルしている
- ・現在の状態については焦点が置かれていない

【図5】 *still*の基本義：過去の状態をプロファイル



したがって、過去の状態をプロファイルする*still*の基本義については、《大過去に開始した出来事が》《参照時点（＝過去）でも継続している》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

3.2 転義

3.2.1 反意的意味

上で見たように*still*の基本義は、次の文のような、客観的な時間軸上における（ある時点から別の時点への）「状態の継続」であった。

- (8) a The custom is *still* found in Japan.
 <その風習は今でも日本に残っている>
- b We've *still* got some wine left over from the party.
 <パーティーで余ったワインがまだ残っている>

しかし、次のような文では、基本義である「状態の継続」に加えて、もう一つの解釈が可能である（Michaelis 1996:195）。

- (9) a I studied all night, and I *still* don't understand it.
 <夜通し勉強したが、まだそれが理解できない>
- b Are you *still* here? – You should have gone home hours ago.
 <まだここにいるの><何時間も前に帰宅しているはずなのに>

もう一つの解釈とは、「発話者が予測・予想したものより長く、ある状態が継続していること」である。すなわち、(9a)では、発話者が予想する以上に何かを理解できない状態が続いている、(9b)では、発話者が予想する以上に相手が帰宅しない状態が続いている、という解釈である。このように、予想される以上に同じ状態が継続している、という含みがあることにより、*still*には時間軸上における一連の出来事の単純な《継続》の意味に加えて(発話者の)《驚き》《以外》といった意味が派生してきているのである⁶。

それでは、《驚き》《以外》から「反意的意味」はどのようにして派生してくるのであろうか。次のような文をみてみよう。

(10) a Mary is rich, *still* she craves more.

<メアリーは金持ちだ、なのにもっと欲しがっている>

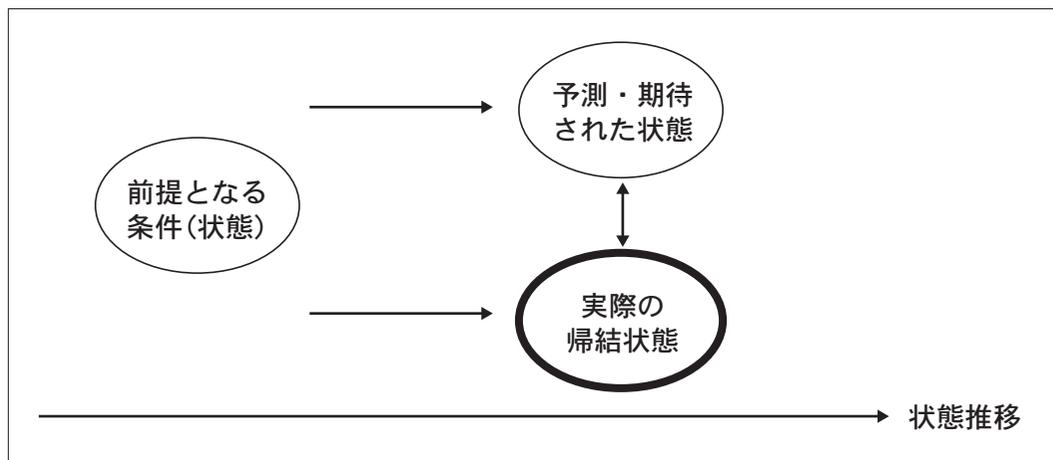
b John did his best, but he *still* failed in the exams.

<ジョンは最善を尽くしたが、それにもかかわらず試験に落ちた>

ここで、*still*を含む節に先行する節を「前提節」(protasis) = p, *still*を含む節を「帰結節」(apodosis) = qと呼ぶことにする。例えば、(10a)では、p=「メアリーは裕福」というのが前提節の内容で、q' = 「多くを望まない」というのが通常予測される状態かもしれないが、実際の帰結節はq=「さらに多くを望む」になっている(つまり、発話者の予測と異なる)。(10b)では、p=「ジョンは最善を尽くした」が前提節の内容で、q' = 「試験に合格するだろう」というのが通常期待される状態かもしれないが、実際の帰結節はq=「試験に不合格になった」(つまり、発話者の期待と異なる)になっている。これらには、発話者が予測した、あるいは期待した状態と現実の状態との間に差異やギャップがあることに焦点が置かれている、すなわち「反意的意味」⁷が生じている。

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・「前提となる条件(状態)」から「実際の帰結状態」への「状態推移」という軸がある(ただし、客観的な時間軸(時間の流れ)と必ずしも同一ではない)
- ・発話者の主観である「予測された状態」と客観的出来事である「実際の帰結状態」との間に対立がある
- ・「実際の帰結状態」について焦点が置かれている(=プロファイルされている)

【図6】 *still*の転義：反意的意味

したがって、反意的意味の*still*の転義については、《前提条件から予測された状態と》《実際の帰結状態とが異なる》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

3.2.2 強意的意味

①数量の増大

上で見たのは英語の副詞*still*の転義の一つである反意的意味であるが、もう一つの転義として、次のような文に見られるようなものがある。

- (11) a Fuel prices could rise *still* further in the coming months.

<燃料価格が次の数ヶ月でまだ上昇するかもしれない>

- b The number of people killed in the explosion is likely to rise *still* higher.

<爆発で死んだ人の数がさらに増えそうだ>

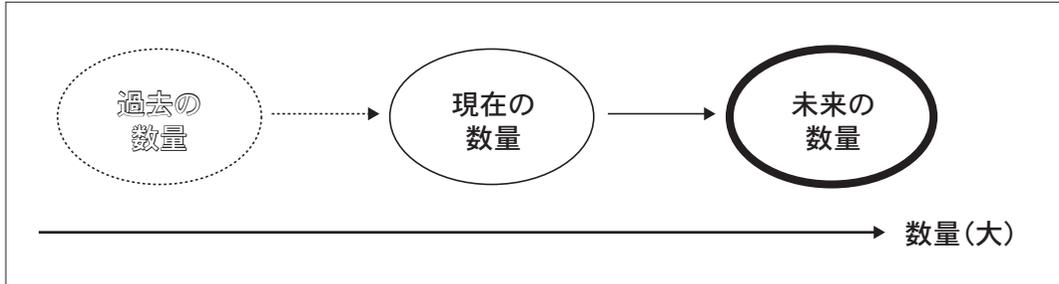
これらの文における*still*は過去のある時期から現在にかけて増加した数量が未来に向けてさらに増加するという意味を表している。この転義は「時間の領域」から「数量の領域」へのメタファー⁸が生じたことによるものと考えられる。つまり、「時間の領域」では、時間軸上に沿って生起する一連の「状態が継続する」という意味であったものが、数量の尺度軸に沿って「数量が増大する」という「数量の領域」へとシフトが起こったのである。

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・ 現在から未来までの数量の増大に焦点が置かれている
- ・ 未来の数量をプロファイルしている

- ・過去の数量については焦点が置かれていない

【図7】 stillの転義（数量の増大）：未来の数量をプロファイル



したがって、未来の数量をプロファイルするstillの転義については、《発話時点（＝現在）での数量が》《未来でも増大する》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

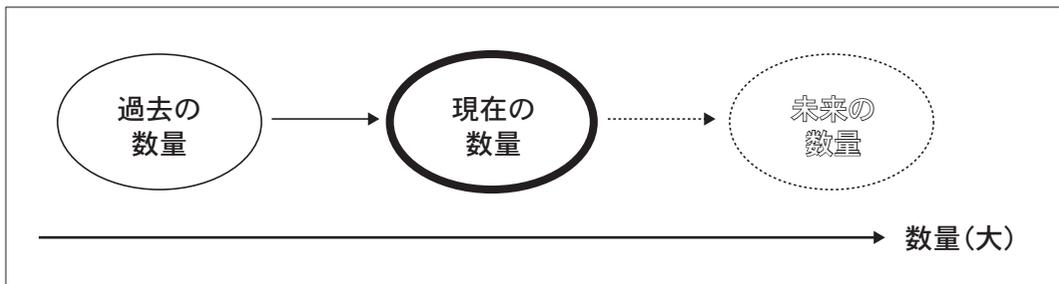
次の文におけるstillも「数量の増大」を表しているが、上の未来の数量をプロファイルするstillと異なる点は、現在の数量をプロファイルしているところである。

- (12) a There are *still* other reasons for that.
 <それには理由がまだほかにいくつかある>
- b John has found *still* another mistake.
 <ジョンはさらにもう一つ誤りを発見した>

この場合のstillの認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・過去から現在までの数量の増大に焦点が置かれている
- ・現在の数量をプロファイルしている
- ・未来の数量については焦点が置かれていない

【図8】 stillの転義（数量の増大）：現在の数量をプロファイル



したがって、現在の数量をプロファイルする*still*の転義については、《過去にある程度存在した数量が》《現在でも増大する》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

最後に、次の文における*still*も「数量の増大」を表しているが、上の現在の数量をプロファイルする*still*と異なる点は、過去の数量をプロファイルしているところである。

(13) a *Still* more snow fell overnight.

<さらにたくさんの雪が夜通し降った>

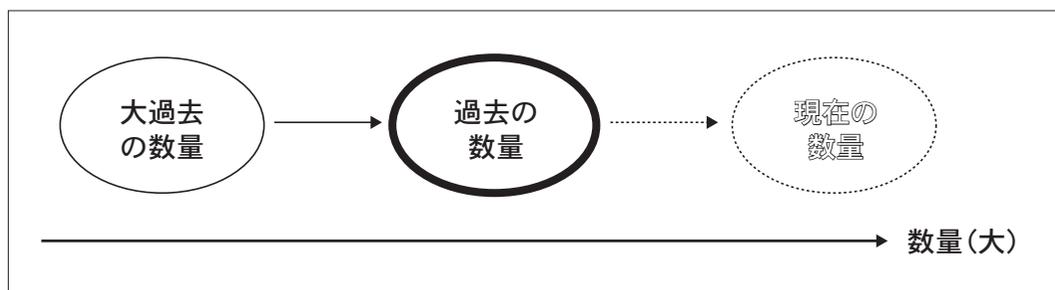
b Mary expected to find *still* more evidence.

<メアリーはさらに多くの証拠が見つかることを期待した>

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・大過去から過去までの数量の増大に焦点が置かれている
- ・過去の数量をプロファイルしている
- ・現在の数量については焦点が置かれていない

【図9】 *still*の転義（数量の増大）：過去の数量をプロファイル



したがって、現在の数量をプロファイルする*still*の転義については、《大過去にある程度存在した数量が》《参照時点（＝過去）でもさらに増大する》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

②程度の増大

上で見た英語の副詞*still*の転義は「時間の領域」から「数量の領域」へのメタファーが生じたことによるものであったが、次のような文を考えてみよう。

(14) a It is cold now, but it will be *still* colder tonight.

<今も寒いですが、今夜はもっと寒くなる>

b The company is hoping to extend its market *still* further.

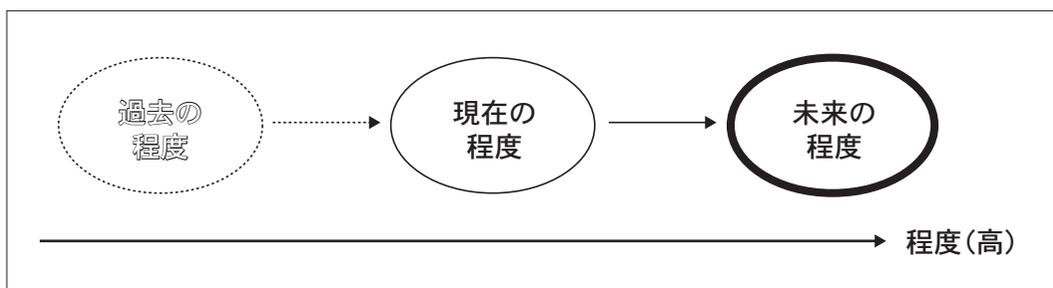
<その会社さらにマーケットを拡大したいと希望している>

この意味での*still*は、比較級とともに用いられることが普通であることからわかるように、「時間の領域」から「程度の領域」へのメタファーが生じたものであると解釈することができる。すなわち、「状態が継続する」という意味から（物事の）「程度が増大する」という意味へのシフトである。

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・ 現在から未来までの程度の増大に焦点が置かれている
- ・ 未来の程度をプロファイルしている
- ・ 過去の程度については焦点が置かれていない

【図10】 *still*の転義（程度の増大）：未来の程度をプロファイル



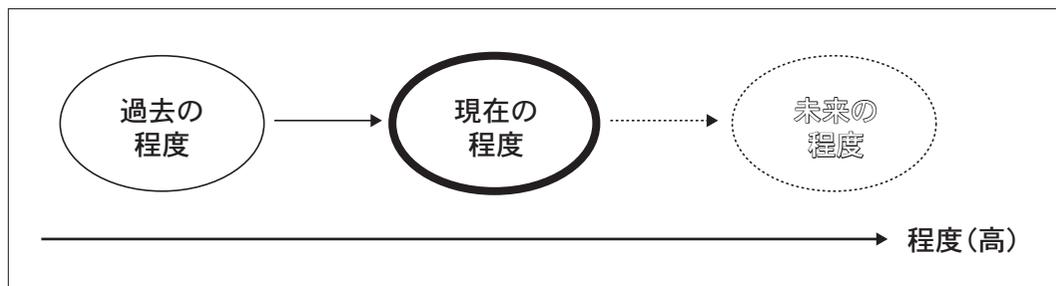
したがって、未来の程度をプロファイルする*still*の転義については、《発話時点（＝現在）での程度が》《未来でも増大する》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。同様に考えると、次のような文における*still*は現在をプロファイルしているといえる。

(15) The patient looks *still* worse today than yesterday.

<きょう患者はきのうよりいっそう悪いようだ>

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・ 過去から現在までの程度の増大に焦点が置かれている
- ・ 現在の程度をプロファイルしている
- ・ 未来の程度については焦点が置かれていない

【図11】 *still*の転義（程度の増大）：現在の程度をプロファイル

したがって、現在の程度をプロファイルする*still*の転義については、《過去のある段階での程度が》《現在でも増大する》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。

③程度の強調

上でみた程度の増大を表す*still*は基本的に同一の事物における程度の増大を意味しているが、次のような文を考えてみよう。

(16) a That sure is a good idea, but I have a *still* better one.

<それは確かにいい考えですが、私にはさらにいい考えがあります>

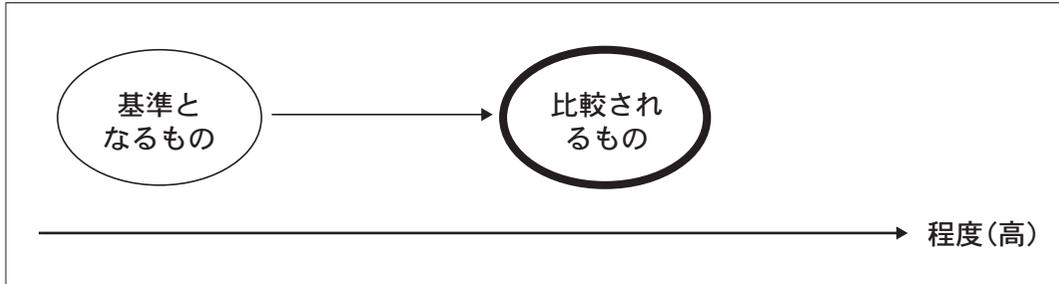
b This exercise is difficult, but that is *still* more difficult.

<この練習問題は難しい、しかし、あのほうがもっと難しい>

これらの文における*still*が程度の増大を表す*still*と若干異なるのは、同一の事物の程度の増大を表すのではなく、別々の二つの事物を比較して、何らかの点で高い程度にある方の事物の程度の高さをさらに強調しているという点である。(16a)では、二つの「考え」が比較されていて、より高い「妥当性」をもつ方に焦点が置かれている。(16b)では、二つの「練習問題」が比較されていて、より高い「難度」をもつ方に焦点が置かれている。

この場合の*still*の認知的構造には、次のような原理が反映しているといえよう。

- ・「基準となるもの」と「比較されるもの」の程度の差異に焦点が置かれている
- ・「比較されるもの」の程度が高いことをプロファイルしている

【図12】 *still*の転義（程度の強調）：二者比較

したがって、二者比較における程度の強調を表す*still*の転義については、《基準となるものの程度と》《比較されるものの程度を対比すると》《両者の差異が極めて大きい》《と発話者が捉える》という概念記述ができるであろう。なお、これは比較の対象が三つに増えても「比較されるもの」がプロファイルされるという点で基本的に変わりはない。

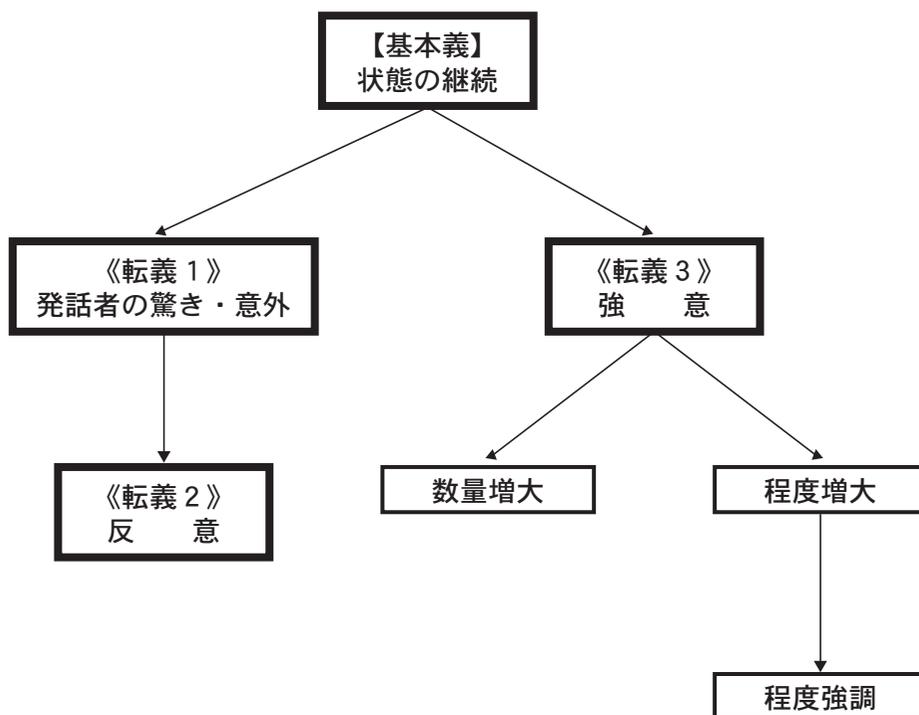
- (17) The first question is difficult, the second is more difficult, and the third is *still* more difficult.
 <第一問は難しい，第二問はもっと難しい，そして，第三問はさらにもっと難しい>

つまり、下の【図13】のように、比較の「基準になるもの」が二つに増えるだけで、「比較されるもの」がプロファイルされるという点だけは変わらないのである。

【図13】 *still*の転義（程度の強調）：三者比較

4. おわりに

本稿では、英語の副詞*still*の多義構造について、認知言語学におけるベースとプロファイルの概念を部分的に援用しつつ分析を行った。ここまでみてきた*still*の多義構造について図で示すと次のようになる。



本稿の冒頭で述べように, *still*には, 基本的な用法として「時間の副詞」および「非時間の副詞」の二つがあり, 時間の副詞としての用法においては, 「状態の継続」という基本義が主要な位置を占め, 非時間の副詞としての用法においては, 「反意」および「強意」の二つの転義が主要な位置を占めている。これらは一見すると, 相互にあまり関連性がないかのようにも思われるが, これまでの分析の結果に基づいて, 基本義から転義への意味拡張のプロセスを図示してみると, それぞれが相互に関連しあってネットワークを構成していることがわかる。

【注】

- 1 この意味の*still*は, concessiveあるいはadversativeと呼ばれ, 日本語では「謙譲」と訳されることもあるが, 本稿では「反意」を用いる。
- 2 このような立場の意味論は「百科事典的意味論」(encyclopedic semantics) と呼ばれる。
- 3 プロファイルとベースという概念は, 知覚心理学の「図」(figure)と「地」(ground)という概念が基盤になっている。すなわち, ベースが地(背景的要素)でプロファイルが図(前景化された要素)にそれぞれ対応する(辻 2002:236)。
- 4 副詞*still*のもともとの意味(語源)は“Keep *still*!” <じっとしている>に見られるような「静止状態の」というものである。古英語と初期中世英語においては, 「静止状態の」を意味する*still*の例は多数あるが, 時間的

意味と反意的意味の例は見出すことができない（リー 2006:156）。

- 5 ここでいう「大過去」とは、「過去」に先立つ前段階としての「過去」という本稿独自の意味において使用している。
- 6 *still*は「現在進行中の事がら、あるいは現在も進行中だと予想される事がらについて語るときに用いられ、現在ある事がらが驚いたことにまだ終了していないことを述べるのに用いられる」(Swan 1995:539)。
- 7 *still*は「しばしば継続と反意の意味を併せ持っている。例えば、It's late and he's *still* working. <もう遅いのには彼はまだ働いている>のような文には、動作の継続だけでなく継続していることが驚くべきことだという含意がある」(Quirk *et al.* 1972:500)
- 8 隠喩、暗喩ともいい、ある経験領域を他の経験領域に写像すること（レイコフ 1993:132）。

【参照文献】

- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』東京：研究社出版。
- Kreidler, C.W. (1998) *Introducing English semantics*. London: Routledge.
- レイコフ, G. (1993)『認知意味論』(池上嘉彦・河上誓作訳) 東京：紀伊國屋書店。(Lakoff, G. (1987) *Woman, fire, and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press.)
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*. vol. 1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (1988) A view of linguistic semantics. In: Brygida, Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in cognitive linguistics*, 49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- リー, D. (2006)『実例で学ぶ認知言語学』(宮浦国江訳) 東京：大修館書店。(Lee, D. (2001) *Cognitive linguistics: An introduction*. Oxford: Oxford University Press.)
- Michaelis, L.A. (1996) Cross-world continuity and the polysemy of adverbial *still*. In: Fauconnier, G. and E. Sweetser (eds.) *Spaces, worlds, and grammar*, 179-226. Chicago: The University of Chicago Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, & J. Svartvik. (1972) *A grammar of contemporary English*. London: Longman.
- Swan, M. (1995) *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 辻幸夫・編 (2002)『認知言語学キーワード辞典』東京：研究社。

【参照英英辞典】

- Cambridge International Dictionary of English*, 1995
- Collin's Cobuild English Dictionary*, 1995
- Concise Oxford Dictionary*, 1990
- Longman Dictionary of Contemporary English*, 1995
- Longman Dictionary of English Language and Culture*, 2002
- Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*, 2007
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 1989
- Webster's New World Dictionary of American English*, 1988

【参照英和辞典】

- 『アドバンストフェイバリット英和辞典』東京書籍, 2002年
- 『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション, 2007年

- 『ジーニアス英和辞典』大修館書店, 1996年
『ラーナーズプログレッシブ英和辞典』小学館, 1997年
『プロシード英和辞典』福武書店, 1991年
『新英和大辞典』研究社, 2002年
『ユニオン英和辞典』研究社, 1980年
『ウィズダム英和辞典』三省堂, 2003年